

## 広国ドリル(国語)のポイント その2 熟語の話

国語の2回目です。今回は、熟語について書きます。

その前に、なぜ訓読み(日本語読み)しかない「漢字」があるか、答えは分かったでしょうか？

それは、中国の漢字をまねて、「漢字」を日本で造ったからです。「畑」「峠」「冨」などが当てはまり、「国字(和製漢字、和字)」と呼ばれます。中国語にはない「漢字」ですから、基本的に音読みはありません(ちなみに、「働」も国字ですが、例外的に「ドウ」という音読みがあり、中国で使われたこともあるそうです)。

では、本題です。同じようなことを言うのにも、場面や意図に合わせて、いろいろな言い方ができます。「(悲しくて)泣く」と言いたいときは、「袖を濡らす／しぼる」「号泣」「慟哭」「鼻をすする」「さめざめ(と泣く)」「ギャン泣き」…。もちろん、それぞれの意味やニュアンスを理解していないと、(うまく)使えません。

「熟語」(複数の漢字や語を組み合わせた語)の意味をつかむには、その熟語の「パーツ」の意味と、パーツがどのような関係になっているかを考えてみるとよいでしょう。

例えば、「みつばち」は「(蜜を集める)蜂」ですが、「はちみつ」は「(蜂が集めた)蜜」です。パーツは同じですが、その関係で、熟語としての意味が変わります。

パーツの組み合わせ方には、いくつかの型があります(下の①から③はその一部です。他の型など、詳しくは広国ドリルで)。

① 2字目を、1字目が詳しく(修飾)している場合。

例) 急造:急いで造る 青鬼:青い鬼 騒音:騒がしい音

② 一方が、他方の動作の対象などを表している場合。

例) 造園:庭園や公園を造る 鬼滅:鬼を滅ぼす 登山:山に登る

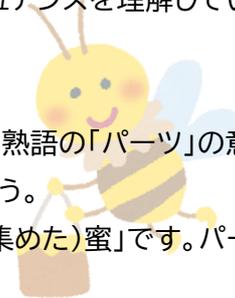
③ 一方が、他方の主語になっている場合。

例) 人造:人が造る 頭痛:頭が痛い 降雪:雪が降る(※「降った雪」とも)

では、上の型を活かして、「注意カンキ」のカンキを漢字で書くときを考えてみましょう。

カンキという音に対応する言葉には、「換気」「喚起」などがあります。「換気」は「(空)気を換える」ですね(②の型)。パーツ(部首)に「口」がある「喚」は、「よぶ、わめく」といった意味ですので、「喚起」は「よんで起こす」です(①の型)。「注意」につなげるなら、「注意をよび起こす」ということで、「喚起」のほうがよさそうですね。「カンキに注意」なら、「換気」ですけど。

このように、熟語の使い方に迷ったら、パーツの意味と、パーツ間の関係も手がかりにしてみましよう。



パーツの意味を組み合わせてみても、その熟語の意味が出てこない熟語もあります。例えば、「嚆矢」という言葉を知っていますか？ ちょっと難しい言葉ですが、前回のコツを活かして読んでみると、「嚆」は「高」が入っているので、「コウ」です。「矢」は「シ」と音読みして、「コウシ」と読みます。

「嚆」は「叫ぶ、鳴る」、「矢」は弓矢の矢です。簡単に言うと、「鳴る矢」ということです。先ほどの①の型ですね。「鳴る矢」が使われる場面って……その通り、戦が始まる場面ですね！ 中国で戦の始まりを知らせるときに、「鏑矢(かぶらや)＝嚆矢」という大きな音が鳴る矢を飛ばしたそうです。そこから、(戦に限らず)物事のはじめという意味で使われるようになった言葉が「嚆矢」です。

このように、難しそうで、覚えにくい言葉も、一度語源から理解しておく、意味(と使い方)を忘れにくくなります。

日常よく使われる熟語や慣用句には、日常の生活とは異なる分野の言葉が語源となっているものもたくさんあります。

例えば、「出番」「板につく」「幕が開く」「幕引き」「幕ノ内弁当(幕内弁當)」「黒幕」「茶番(劇)」「裏方」「お家芸」「大詰め」「二枚目・三枚目」「男前」「(恋の)鞆(さや)当て」「十八番(おはこ)」「捨て台詞」「泥仕合」などは、もともと狂言、歌舞伎、演劇などの舞台芸能に関して使われていた言葉を転用した言葉だそうです(諸説あります。気になる言葉は、ぜひ辞書で調べてみましょう)。

語源となっている舞台芸能のイメージを具体的に思い浮かべながら、まとめて覚えいくと、意味が理解しやすく、定着しやすいのではないのでしょうか。

そう言えば、「泥縄式の対策」などと言うことがありますが、「泥縄」って、どんな「縄」でしょうか？ 調べてみてください。

今回の内容についても、広国ドリルでたくさんの実例を使って復習できますので、ぜひ取り組んでみましょう。